

■2016年度フライブルク大学主催夏大学参加者を引率して



欧州各地で頻発するテロ事件のため、その開催が心配されていたフライブルク大学主催の夏大学（2016年度より夏季語学講座から改称）が予定通り実施された。本学独自の新短期留学制度が始まって2回目の今回もチャレンジ精神あふれる学生諸君がフライブルクへと向かった。2016年度夏大学は開始が8月3日、終了が8月26日であったが、本学の参加者は前期試験の日程の都合で、2日遅れの5日からのスタートとなった。到着日の8月4日から1週間ほどは朝方には吐く息が白くなるほど肌寒い日が続いたが、ほぼ連日抜けるような青空が広がるなど実に天気にも恵まれた今回のフライブルクの夏大学であった。

夏大学期間中は参加学生に付き添ってほしいという武田理事長、乾前学長の要請を受け、今回は3人の職員が渡航から帰国まで交代でフライブルクに滞在した。凶悪なテロ行為のため早々と派遣を中止する古参の参加校もあり、今回の夏大学の参加者数は例年よりかなり減少したらしいが、隣国での凶行にもかかわらず、大学関係者もフライブルク市民も特に気に留める様子もなく、極めて平穏な日々であった。

今回の夏大学は広報が悪かったのかあるいは学生諸君の関心が薄れたのか11名という過去最低の人数になったのが気になるところである。今まで参加者は三々五々フライブルク入りを果たしていたが、今回は遅れて参加するため、11名の学生諸君は往復とも初めて団体行動となった。

さて肝心の夏大学だが午前中は教室内でのドイツ語の学習、午後は習いたてのドイツ語を応用するべく教室の外に出るという流れになっている。そのために数多くのレクリエーションプログラムが用意されている。とにかく日が長いので、個人的に近郊の町や村に出かけていくもの、中には国境を越えてフランスのストラスブールの大聖堂の見学に行ったり、あるいは香川真司選手の試合を観戦にドルトムントまで遠征するものなど、各自思い思いのドイツ滞在を楽しんだ。

このようにドイツ滞在未経験の参加者でも楽しく安心して過ごすことができるのも、有能かつ助力を惜しまないスタッフが、曜日、昼夜を問わず陰からサポートする体制がとられているおかげだ。予期せず病気をしたり、怪我をしても海外旅行保険に加入（必須条件）しておけば、病院の紹介から手続きなど運営事務局のスタッフや現地協力者によるサポートがある。

フライブルクで格安な滞在を可能とするため新しく導入された短期留学制度は夏大学での受講料と学生寮の家賃（1000ユーロ、2016年実績）を大学が負担するという実に太っ腹な制度である。本学の設ける一定の基準を満たせば誰でもドイツでの短期留学が可能だ。本学の定員は20名（2016年実績）である。

それでは2016年8月に約1月間ドイツで様々な異文化体験をした参加者の代表にその体験を報告してもらおう。この体験談を読んで、ドイツ短期留学に興味を覚えた諸君、ドイツという未知の国で能力や度胸を試そうと考える諸君には是非ともこの夏にチャレンジを願いたい。

フライブルク大学短期留学の詳細は愛学館4Fの桑形研究室まで問い合わせてください。現1～2年次生諸君のノックを待っています。



医学部付属病院院内薬局の見学を終えて

ドイツ語担当准教授
日本フライブルク・アルムニ会会員
ひろし
桑形 広司

■進路支援課 太田 寛之

事務職員がフライブルクに派遣されるのは今年で2回目となります。桑形准教授と昨年も引率した国際交流推進室の北田事務員と私の3名が交代で、学生の1ヶ月間の留学をサポートしてきました。

フライブルク大学は留学生のサポート体制が整っていることから、私は特に現地サポートスタッフとの信頼関係の構築に注力しました。職員2名から引継ぎを受け、帰国したあとの10日間の滞在中、現地スタッフと4回ほど顔を合わせ、学内の様子や学生の取り組み状況などを伺いました。また、同大学は英語

のプログラムも開講していることから、初心者クラスの授業を見学し、日本の大学から参加している学生に話を聞くなど、次年度以降に本学の留学制度で活かせる要素について情報収集をおこないました。

一方、本学の学生は、午前中はドイツ語の授業を受け、午後は各自で計画したアクティビティに取り組むなど、語学だけでなく充実した経験も得たようです。同大学薬学部の研究室を訪問する学生、またサッカーのブンデスリーガを観戦しに行く学生などもおり、それぞれが目的を持って計画・行動してい



サポートスタッフの打ち上げの様子

りえ
■ 3年次生 佐野 里衣

この夏、1ヶ月間フライブルク大学に留学させていただきました。ドイツ語や英語の語学力向上だけでなく、これまでの自分の生活を振り返り、常に自分で考え行動できるようにすること、自分の考えを言葉にして言えるようにすること、積極的にコミュニケーションをとること等、自分に足りないものを実感し、そして今後どうしていくべきなのか見つめ直す良い機会となりました。また初めて自分の育った環境や文化から離れ、ヨーロッパの文化に触れることで、刺激を受け感動すると同時に日本の良さを改めて感じることができました。

この1ヶ月間、駆け抜けるように過ぎてしまいましたが、振り返ってみると毎日が充実していましたし、共に留学し頑張ったかけがえのない仲間を得ることができました。今回得られたことすべてが今後

ました。

さて、ドイツ南西部、フランスとスイスの国境沿いに位置するフライブルクは、学生の街、観光・環境都市の2つの側面があります。みなさんも多くの国々から人が集まるこの美しい都市に注目していただき、次年度の留学先として考えていただければと思います。

帰国日には学生から「もっと滞在したい」という声もあがっており、皆にとって有意義な時間であったと思います。今回の経験で得たことをこれからの学生生活に活かし、さらに成長することを期待しています。

の生活にプラスになると感じています。思い切って参加して良かったと心から思うことができました。

このような機会を与えてくださり、安全に過ごせるよう配慮して下さった本学関係者の皆様に心から感謝いたします。ありがとうございました。



フライブルクの街並みを一望できるシャウインスラントで

まさお
■ 2年次生 板原 多勇

私はこの夏、ドイツのフライブルク大学に、約1ヶ月の短期留学をしました。留学の大きな目的は、ドイツ語学習と薬学部のラボを見学することでした。ここではラボについて、話を進めたいと思います。



フライブルク大学の薬学部研究棟の一つ

まず、ラボがフライブルクの町中に散らばって建っていることに驚きました。実際に有機化学と酵

素のラボを見学させてもらったのですが、見たこともない大きさのカラム（重かったです）や遠心機がありました。また測定機器の量が、ラボの人数に対して多く、広々としたラボであったので、落ち着いて研究に打ち込める環境だなと思いました。幸いなことに、有機化学の教授と話をする機会にも恵まれ、こんな自分の考えをしっかりと聞いてくれ、意見ももらえました。また、話の中で研究者が興味を持つ内容はどこでも同じ（今はEpigenetic制御）であることもわかり、研究は世界中の研究者との競争であることを実感させられました。そして驚いたことに、その教授は、来週からバカンスに行くのを、楽しみにしていました。

ところで、現地の学生と話してみると、自分の興味をもつことや目標を臆することなく語ってくれました。やはり何か目標を持ち、それに向けて努力することが大切なのではないかと感じました。最後に、留学を支えてくださった方々に感謝します。

■ 2年次生 福田 剛大

私の留学の一番大きな目的は、異国で生活すること自体だったので、あちこち出かけていたわけではありません。他の人と比べても、訪れた場所は少ないはずです。

しかしそうしていても、感動させられるものは沢山ありました。レンガ造りの大聖堂、ステンドグラスやパステルカラーの家々、一面のブドウ畑やトウモロコシ畑。何もかもが目新しく、心の底から感嘆するばかりでした。

平日の午後からは自由参加の授業にも出席しました。フランス、ギリシャ、台湾、ジンバブエなどなど、あちこちの国の人がいる中、日本人は私だけで、もちろん会話は英語でした。自分の表現力不足に打ちのめされる毎日でしたが、授業内容以外でも多くのことを学べる、本当にいい時間でした。

そのような全くの非日常を体験しているとき、「日本文化、日本民族とは何か」という問いが浮か



フライブルクの大聖堂



寮の中国人と

びました。私は確かに日本語を使い、日本文化についてのある程度の知識はあります。しかし、私の中に私を日本人たらしめる何かがあるのか。今でもそれは見つかっていません。こうしたことを考えられたことが、私にとっては留学の一番の成果です。

数多くの発見や出会いがあったあの町に、いつかまた訪れることができればと、心から思います。

■ 2年次生 藤井 喬子

私は、ドイツ語を学ぶことはもちろんですが、海外に行くことで自分の経験の幅を広げたいと思い、今回のドイツ留学に参加しました。



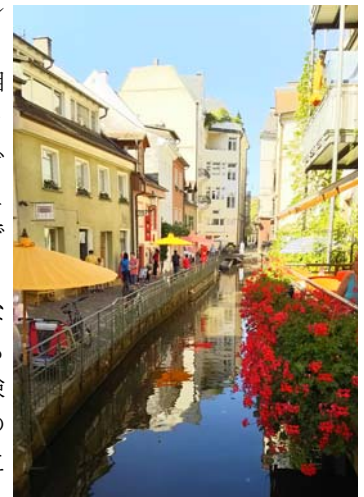
朝市の店先で売られていた野菜

ドイツでは、フライブルク大学の寮の一室を借り、そこから毎日大学に行っていました。初めての海外、初めての寮生活に初めはとても緊張しました。授業は、ドイツ語でしたがジェスチャーや絵を使って理解していくうちに語彙が増えていき、会話も少しできるようになりました。

その他授業では街に出てインタビューをしたり、

朝市に出かけたりもしました。午後からのアクティビティでは、美術館巡りや「ムンデンホーフ（動物自然公園）」に連れて行っていただき、芸術や自然に触れることができよかったです。そのほか、オルガンコンサートやジャズを聞きに行きました。とても迫力がありました。

寮の方たちとは、主に英語を使ってコミュニケーションをとっていました。出身国も文化も違う中、自分の拙い英語で相互理解するのは難しいところもありましたが、少しずつ打ち解けていくことができ楽しかったです。ドイツに留学して、言語を学ぶだけではなく、文化に触れることもできました。今回の経験をこれからの大学生活のモチベーションアップにつなげたいと思います。



ある喫茶店からの風景

